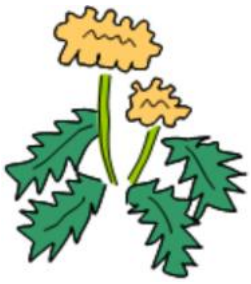
たんぽぽ

NO.471
R8年11月1日
-発行-
〒869-1217
熊本県菊池郡
大津町森54-2
社会福祉法人
三気の会
三気の里
☎096-293-8100



「異常気象とその備えについて」

施設長　木下 昭二

近年、日本列島では「異常気象」という言葉が特別なものではなくなりつつあります。今年も各地で線状降水帯が発生し、短時間に集中する豪雨が大きな被害をもたらしました。千葉県では複数回にわたり水害が発生し、台風25号の影響で印旛沼や角川、長門川など複数箇所で堤防が決壊し、大規模な浸水が広がりました。被災された住民の皆さまの不安やご苦労を思うと心が痛みます。

また、梅雨の初期には雨不足によってダムの貯水率が低下し、取水制限が報じられていました。地域によっては現在も貯水率が50～60%台にとどまるなど、雨の降り方に大きな地域差が見られています。更に、10月後半になっても30℃を超える真夏日がある一方、その数日後には北海道で初冠雪が報じられるなど、夏と冬の二季化を思わせる現象も見られます。私たちが長年慣れ親しんできた四季の移り変わりや季節のリズムが、確実に変化していることを実感します。

こうした気象の変化は、三気の里の利用者の皆さんにとっても大きな課題となります。急な避難や先の見通しが立たない不安定な生活は、心身に大きな負担となり得ます。だからこそ、職員一人ひとりが「異常気象はいつ、どこで起こってもおかしくない」という意識を持ち日頃から備えをし、平時より心構えを共有しておくことが大切です。特に水害への備えは重要です。線状降水帯による豪雨は、急激に状況が悪化することもあり、避難の判断が遅れれば命の危険に直結します。施設の建物は幸い高台に位置しており、「豪雨の予報＝避難が必要」となる訳ではありません。しかし、利用者さんの生活を支える職員の皆さんには、ハザードマップを活用し、自宅周辺から施設までの危険箇所や通勤経路の安全を確認すると共に、何よりも「自分の命を守ること」を最優先に考えるように伝えています。

災害時の生活を維持するためには、「水」「情報」「安全」の三つを確保することが重要です。豪雨による停電や断水を想定し、飲料水や簡易食、携帯トイレ、懐中電灯、モバイルバッテリーなどの備蓄を定期的に見直すことは欠かせません。また、服薬が必要な利用者さんのために、薬の予備や管理方法についても平時から確認しておく必要があります。

災害は特別な出来事ではなく、日常の延長線上にあるものです。豪雨や台風だけでなく、夏の猛暑や冬の寒波も含め、季節ごとのリスクを職員全体で共有し、日々の備えを積み重ねることが大きな安心に繋がります。

三気の里には、利用者の皆さんが安心して過ごせる環境を守る責務があります。災害そのものを避けることは難しくても、日頃の心構えと準備によって、その影響を最小限に抑えることは出来ます。これからも職員一人ひとりが防災や備えについて学び続け、地域との連携を深めながら、利用者の皆さんの命と暮らしを守る支援体制を、より強固なものにしていきたいと思っています。





「初めての体験」

10月の澄み渡るような秋晴れの天気のいい日に、今年度2回目となる1班のレクリエーションに行きました。前回のレクリエーションでは、大雨で予定していたアイスクリーム作りが出来なくなってしまいました。利用者さんも楽しみにされていたので、残念だったことと思います。今回は前回とはうって変わり、最高のレクリエーション日和となりホッとしました。

今回は、昼食を焼肉店の彩炉へ行き焼肉ランチ、ハンバーグランチから食べたい方を選びました。サラダバーやデザートもついていて、みなさん大満足だったのではないかと思います。

昼食の後は和菓子作り体験をしました。初めての体験です。講師の方に教わりながら2種類の和菓子を作りましたが、とても難しかったです。それでも器用にこねたり、丸めたりされている利用者さんもいらっしゃり、器用だなぁとただただ感心していました。また新たな一面を見させていただいた日となりました。

支援員　吉田理江

「はい、ポーズ」

我が子と離れて暮らす親御さんは、スタッフが撮影したごく日常の写真でもとても喜んで下さいます。中には、それらの写真を励みに日々を頑張っておられる方も少なくないと感じます。自分はさて置き、我が子の写真をいくつになっても残しておきたいと思うのが世の常ではないでしょうか。近年は、デジカメやスマホの普及で写真自体は簡単にいつでも残せますが、だからこそプロに撮影してもらうのは特別感があります。

さて、１０／１４に２班レクレーションは、あそ望の郷でプロのカメラマンをお呼びして写真撮影会を行いました。利用者さんの特性を考慮すると、ご家庭で依頼するには心理的ハードルが高いプロのカメラマンによる写真撮影を是非実現させたいという思いが背景にあり、企画しました。コスモスや色付いたコキア畑をバックに、普段よりちょっぴりおしゃれをした利用者さん達が思い思いのポーズを取ります。スタッフとしても少しでも良い表情が撮れるよう、カメラマンの後ろでスタッフが身振り手振りで声をかけこちら側を見てもらいます。カメラマンさんも長くなり過ぎないように、手際よく撮影をして下さいました。お陰で、皆さん見事にモデルになり切ってくれました。今から出来上がりが楽しみです。保護者の方にとっても、記念に残る写真になっていただければ幸いです。

副主任　杉本安代

ちょっとひと息、た

「ちょっとひと息、たまのご褒美」

私は毎日、運転中に好きな音楽を聴くことで息抜きをして、たまに、家族や友人と美味しいものを食べに行くことで、自分にご褒美をあげています。一日の中でリラックスする時間があることで気持ちのリセットができ、たまのご褒美があることで「また明日から頑張ろう」と思えます。それは、利用者さんにとっても同じではないかと思います。
三気の里に入職して3年目を迎えました。日課を支えることで精一杯の自分から脱却したいと思い、今年は、利用者さんの生活の中に「楽しみ」を提供できるようになることを目標としています。まず、日々の息抜きとして、余暇時間の充実を図っています。利用者さんが好きなことをして、リラックスして過ごしている様子を見ると、私も嬉しくなります。また、1～2か月に1度、担当利用者さんと個別外出に出掛けています。事前に日程を決め、カレンダーを見ながら数日おきに確認します。最近では、利用者さんの方から確認をしに来てくださいます。利用者さんにとっての「楽しみ」になっているのだと、嬉しく思う瞬間です。これからも野菜作業だけではなく、その先にある楽しみや喜びも大切にしていきたいです。

支援員　野尻桃子

「これからも」

12歳の自閉症の息子といると毎日色々ある。「なぜこのような行動をとるのか」と頭を抱えたり、反対に共通性を見つけ「お母さんも同じだよ」と呟いたり、ある時は、息子の純粋な世界に触れ、心が温かくなったり、反対に苦しくなったり。何かしら心を動かす日々を過ごしている。
十分に向き合うことができなかった日は、余裕がなかった、もっと時間があればできた、とできなかった理由を並べて言い訳をする。1日を振り返る時間を意識して作る。最後は自分を励まし眠りにつく。
結局、自分の機嫌は自分で取るしかない。息子にこれをどう伝えるか、そして、息子が自分の機嫌を取るための術となる余暇の提供が、私のこれからの課題である。
先日、久し振りに本屋に行った。何冊か手に取り、パラパラとめくっていると、本の中の一行の言葉に目が留まった。
「樹木も頑丈に育つためには、風に揺れる必要がある」
揺れながら、楽しみながら、希望を持ってこれからも向き合っていく。

支援員　室屋みゆき



療育雑記

「経験」

主任　藤本　優香

先日参加させていただいた研修の中で、〈私たちは支援者として利用者さんが失敗をしないように支援をしがちであるが失敗した経験から学ぶことも多い。利用者さんが失敗しないように先回りして誘導するのは、意思決定支援ではなく、失敗する権利を奪っていることになる〉という話がありました。

随分前の話になるのですが、Aさんと外食に行った際のことです。Aさんが飲みたい「アイスコーヒー」の文字がメニューに載っていませんでした。これは一大事とばかりにAさんはメニュー表を必死にめくって探されました。実際はドリンクバーに含まれているので、その説明をしてドリンクバーを注文しましたが、Aさんにとっては、私が「アイスコーヒー」と言う言葉で注文していないので、店員さんが下げようとしていたメニュー表を何度も見直されました。店員さんも、ドリンクバーの中にアイスコーヒーがあることを説明して下さいましたが、納得されていない様子でした。実際に一緒にドリンクバーに行き、機械を操作し自分で淹れることによってアイスコーヒーを飲むことができ、安心されました。ドリンクバーではコップを取り、好みの飲み物のボタンがあるところへコップを置き、ボタンを押すという動作を一つずつ説明しながら一緒に行いました。外食の度に付き添ってドリンクバーを経験することで、徐々にそのシステムにも慣れてきたAさんは、「アイスコーヒー」と注文しなくても慌てることはなくなりました。

買い物の際の支払いも同様で、レジで商品と一緒に自分の財布を渡そうとするBさん。お会計の金額を1円単位まで同じ金額で払おうとして、財布にお金は入っていても、小銭まで同じ金額が入っていなければ「ないです。」と言ってしまうCさん。2人ともに買い物や食事などの機会に支払いで大きいお金を出して、お釣りをもらうことに取り組み、経験を積むことで、お金を支払うことができるようになってきていました。

しかし、ここ数年で多くの店舗で、自動精算機やセミセルフレジが増えてきました。店員さんではなく機械にお金を入れることに戸惑いが見られ、Bさんは店員さんに渡そうとされていました。また、機械によって紙幣を縦に入れるところもあれば、横にして入れるところもあるのでその都度、声かけをしています。お金を入れた途端吸い込まれるように入っていくので手を放すタイミングが難しく危うく機械とCさんの引っ張り合いになりそうになることもありました。お金を入れるまでにも、現金なのかカードなのか等の支払方法の選択、会計ボタン、レシートが必要か不要かのボタン等操作がいくつもあります。「ここを押して」と促すのですが、ボタンも出っ張りではなく画面上のタッチパネルが多いので、押した実感の分かりにくさがあります。しかし、困ることばかりではなく、今までは後ろに並んでいる人が多いと支援者側が焦ってしまい、支払いを代行する場面もありましたが、機械は複数台設置してあるところが多いので、あまり後ろに人が並ぶことを気にしなくてもよくなったというメリットがあります。

経験から学んだことは、身に付きやすいものだと思います。毎日の生活の中にも、実際には利用者さんが経験の機会を逃してきたことが沢山あると思います。支援者が先回りしてやってしまうのではなく、成功も失敗も一緒に経験し積み重ねていくことで、出来ることが一つでも増やせるように、支援をしていきたいと思います。



相談

「その人らしさを考える」

相談支援専門員　武谷祐子

相談支援専門員の仕事の一つに、サービス等利用計画の作成があります。障害福祉サービスを利用するために必要なもので、作成に当たっては、利用者さんやご家族から「どのような生活を望んでいるのか」「どのようになりたいのか」「将来の夢は何か」などを聞き取り、その実現に向けて何が必要なのかを一緒に考えていきます。

利用者さんの将来を想像しながら聞き取りを行いますが、三気の利用者さんは、ご自身の気持ちを伝えることが難しい方が多く、主にご家族や支援者から話を伺うことになります。ここで大切なのが、ご家族や支援者の思いを、そのまま本人の希望と捉えないことです。周囲が考える「本人にとってよい生活」と、本人が望む生活は、必ずしも同じとは限りません。

言葉で気持ちを伝えることが難しくても、日々の表情や行動、好きなことや苦手なことなどから、本人の思いをくみ取ることはできます。本人の反応を丁寧に観察し、さまざまな方法で意思を確認しながら、一人ひとりの希望や可能性を探っていくことが大切です。本人を中心に考え、ご家族や支援者と協力しながら、その人らしい生活の実現を目指していきたいと思います。



運動会

「第35回運動会」

支援員　北岡哲

去年はとても暑かった運動会であったことが記憶に残っていました。今年はどうかなと心配でした。しかし、当日は晴れ模様で涼しい風の吹く、天気に恵まれた運動会でした。

今年は種目を少し変え、例年の30ｍ走、玉入れ、菓子取り競争に加え、ネットの下をくぐる障害物走を行いました。

「よーいドン」の合図で、ゴールテープに向かって走る姿、ネットを手で払いながらくぐる姿、玉を全部入れる勢いの姿、種類の多いパンと菓子の中から、悩みながら取られる姿など、運動会でしか観ることが出来ない姿を見ることができました。

運動会後は、頑張った身体を癒す豪華な弁当を、美味しそうに食べられる姿を観ることができました。運動会が始まるまでは不安でしたが、利用者さんの様々な姿を観ることができ、また、沢山の人の協力もあって、やって良かったなと思いながら「第35回運動会」を無事に終えることができました。





11月スケジュール

05(木)　ドーナツの日
10(火)　ブラッシング指導
14(土)　開園記念祭
17(火)　皮膚科Dr往診
19(木)　嘱託医往診
　　田中Drケースカンファレンス
20(金)　リハの日
25(水)　音楽の日
　　強度行動障害実践研修(～26日)
26(木)　九州・山口・四国自閉症施設協議会
　　(～27日)
27(金)　産業医職場巡視・茶話会
28(土)　地域ミニバレー大会・eスポーツの日
29(日)　かくたつ研修(～12/1)

訪問理容サービス　　02(月)、16(月)
毎週水曜日　BeTREE役場販売
BeTREE
＜営業時間＞9:30～17:30





沢山のご厚意
ありがとう
ございます

【寄付】
有馬 幸雄様
千田 英文様
林 千莎子様
田中 満子様
三気の里家族会様

【物品寄付】
田中 智子様
岩切 美佐子様
長田 修様
つくしの里様
西日本防災システム様
ヤマモト住建様

【後援会ありがとう】
千田 英文様
森川 マサミ様
藤原 芙佐子様
菊池 フジ子様
甲斐 真史様

編集後記

10月が終わり、ようやく秋らしい季節になってきました。近年、秋はどこに行ってしまったのだろうか？日本に四季はなくなってしまったのではないか？という年が続きましたが、今年は少し秋を感じられたのではないかと思います。

私は秋が一番好きな季節なのですが、この過ごしやすく、大好きな季節はあっという間に終わってしまいます。この秋という短い季節を利用者さんと共に目や肌で感じ、日々を過ごしていきたいと思います。

吉田理江

